

令和元年8月29日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2018

課題番号：25370837

研究課題名（和文）19世紀後半の中国における地方軍事勢力と社会変容 郷勇と諸反乱

研究課題名（英文）Local military groups and social change of China in 19th century; Xiangyong and rebellions

研究代表者

菊池 秀明（KIKUCHI, Hideaki）

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：20257588

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は19世紀後半の中国における地方軍事勢力、湘軍と淮軍、太平天国を取りあげ、それらの活動が中国社会にもたらした変化について考察する。湘軍、淮軍の創設者である曾国藩、李鴻章は洋務運動を推進したことで知られるが、本研究は郷勇と反乱が政治的には敵対しながらも、パーソナルな社会的結合に基づく地方軍事勢力という共通点を持っていたことを解明する。また洋務派官僚は地方政府とエリートの一種の自治権を強化して専制体制からの脱却をめざしたが、その近代化事業は中央集権化への志向を欠いていた点で日本の明治維新と異なっていた。本研究は近代の日中両社会に大きな差異を生んだこれら地方軍事勢力の特質を明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

代表者は中国近代史を「革命か、改革かに関わりなく、中国史上初めて南方から変革が行われた時代」と捉えており、太平天国と湘軍などの軍事勢力もその重要な担い手であった。本研究は清末中国の社会変容について考察を進めることで、中国社会の多様性と向かい合う格好の事例研究を提供できると考えている。また20世紀の日本は中国の軍閥を忠誠心の欠いた私兵集団と見なし、大陸侵略を推し進めた。これらの軍事勢力の歴史的意義を考察することは、日本人の中国認識に対する反省を促すことになる。また中国国民党の「党国」体制や共産党の一元独裁体制についても、近代の地方勢力割拠に対する反作用として見た時にその歴史的立場が明らかになる。

研究成果の概要（英文）：This research studied the Chinese local military groups, Xiangjun, Huaijun, and Taipingtianguo in 19th century, and analyzed its influences to the social changes. Zengguofan and Lihongzhang, who are the founder of Xiangjun and Huaijun are famous of their contribution to the modernization of China. This research clarified these groups had the same characters based on their personal social networks. The officials and bureaucrats who were the leader of these groups got the political power of local governments, and local elites who gathered around them tried to get a kind of autonomy and change the autocracy of Chinese dynasties for about two thousand years. They were different from the Meiji Restoration just because their Modernization lacked the intention of Centralization. This research elucidated the characteristic of the local military groups that made the differences of the society and history between Japan and China.

研究分野：中国近代史

キーワード：地方軍事勢力 湘軍 太平天国 淮軍 曾国藩 李鴻章 洋務運動 党国体制

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究に着手した当時は尖閣問題などで深刻だった日中関係を踏まえ、日中の近代史認識をめぐる差異を明確に認識し、その違いを生んだ両国の歴史的特質について冷静な立場から理解を深めることを出発点にした。とくに日本と中国の近代史は出発点が異なり、中国では専制王朝の硬直した支配体制を打破し、地方の自立性を高めようとする動きが基調となったことに注目した。

その担い手であった地方軍事勢力の活動とその影響を理解することは、中国の近代史の特質を明らかにするうえで重要であると考えられた。なぜならそれらの歴史はその後の革命勢力によって軍閥あるいは分裂主義と評価されて否定されてきたからである。その結果国民党、共産党共に「党国」体制という一党独裁体制を取ることにになり、大陸においてはその影響が現在も続いている。大国化を進めている中国の未来を考える上で、逆にこれらの歴史は重要なヒントを与えられと思われた。

2. 研究の目的

本研究は19世紀後半の中国における地方軍事勢力、即ち郷勇（湘軍と淮軍）、後期の太平天国および各地に割拠した反乱集団を取りあげ、それらの活動が中国社会にもたらした変化について考察した。湘軍、淮軍の創設者である曾国藩、李鴻章は洋務運動を推進したことで知られるが、本研究は郷勇と諸反乱が政治的には敵対しながらも、パーソナルな社会的結合に基づく地方軍事勢力という共通点を持っていたことに注目した。

また湘軍、淮軍出身者から成る洋務派官僚は地方政府およびエリートの発言権を強化して専制体制からの脱却をめざしたが、その近代化事業は中央集権化への志向を欠いていた点で日本の明治維新と異なっていた。本研究は近代の日中両社会に大きな差異を生んだこれら地方軍事勢力の特質を比較史的観点から明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究に当たっては、これまで大陸、台湾およびイギリスで収集してきた史料とくに档案と呼ばれる公文書を主要史料として分析を進めた。これに中国各地でのフィールドワークで収集した筆記史料、族譜などの分析を組み合わせた。またその作業は草書体の漢文を読むなど特殊な技術を必要としたため、時間を要したが現地研究者と密接な協力関係を築き、進行状況に合わせて対象地域の範囲を調整した。

これらの作業そのものは順調に進んだが、研究の問いのあり方は中国の政治状況の変化によって大きな影響を受けた。とくに習近平が中央への権力集中を進め、腐敗幹部の掃蕩を進める中で地方の自主性を奪っただけでなく、台湾、香港問題でも強硬な姿勢を強めたことは、「なぜ中国の政治体制はトップダウンのシステムに頼り、多様性を認めることが出来ないのか」という問題に向き合わざるを得ない状況を生んだ。途中参加予定だった中国国内の学会が、政治情勢が不安定だったために延期ないしは中止になったり、学術討論会に参加した論文の一部が削除される事態も発生した。

こうした中で、香港や台湾の現状を考える研究会などに出席し、研究者とのネットワークを広げることで、中国近代史の認識そのものの枠組みを見直す作業を進めた。それは研究期間中に刊行した著書およびその後の研究活動にも活かすことができた。

4. 研究成果

研究成果については、まず単著として『北伐と西征』を刊行し、1856年までの太平天国、湘軍の動向について分析を加えた。また上述の中国の情勢変化に対応して分析を進め、以下のような結論を提起した。

民族の復興をとらえて大国化する現在の中国では、習近平が絶大な権限をにぎり、賢明な指導者による権威主義的な統治こそは中国の伝統を踏まえた理想であると主張している。また異なる意見を認めず、民主派や少数民族、台湾や香港など社会の多様なあり方を求める動きを「国家の分裂を招く」という理由で拒否し続けている。さらには経済力を背景に国際秩序の転換をはかり、周辺諸国に対する影響力と軍事的な圧力を強めている。

これらの政策は長く列強の侵略に苦しんだ中国人の自尊心をくすぐり、多くの支持を集めていると言われる。だがそれが本当に中国の歩むべき唯一の道なのだろうか。また日本は東アジアの一員として、中国とどのような関係を結ぶべきなのだろうか。

だが一六〇年余り前の中国では皇帝の称号を否定し、複数の王からなる政権をうち立てようとした事件があった。太平天国である。その指導者洪秀全はキリスト教が太古の中国で信仰されていた宗教であると考え、秦の始皇帝以来の歴代皇帝が上帝ヤハウエを冒瀆してきたと批判した。

そしていにしへの中国に立ち戻るべく、満州人王朝である清朝の打倒を唱えて蜂起した。

一八五三年に南京を占領した太平天国は、全ての人々が上帝のもとで「衣食に困らない」生活を送るための国家建設を進めた。また天王を名のった洪秀全のほかに、五人の王たちが配下の人々を支配した。彼らは洪秀全に対して臣下の立場をとったが、彼らは洪秀全と同じく上帝の子であり、洪秀全は彼らを「同胞の弟」と呼んだ。南京到達後、王たちはそれぞれ王府を開き、自ら科挙試験を実施した。また占領地での貢物も各王府が人を派遣して調達した。つまり皇帝を否定した太平天国は「封土なき封建王朝」をめざしたと考えられる。

だが二千年来の中国の皇帝支配を打ち破ることは容易ではなかった。太平天国は皇帝の称号を否定したが、洪秀全は「天下万国の真主」つまり救世主としての顔を持っていた。古来中国の皇帝は全世界に君臨すると考えられており、救世主としての洪秀全も例外ではなかった。このため太平天国のキリスト教的性格に期待した欧米諸国が南京へ使節を派遣すると、太平天国は彼らに臣下の立場を取るよう要求した。欧米側はこれを華夷思想の現れと受けとめ、外交交渉は失敗した。

また太平天国に固有なもう一つの問題点として、シャーマンであった楊秀清の存在があった。東王であった彼は軍師となり、宗教的指導者としての側面が強かった洪秀全と分担する形で政治、軍事を取りしきった。だが彼が上帝やハウエを降臨させると、「洪秀全の父」として絶対的な権限を握った。これは太平天国指導者の家族観から見れば世代ランクの紊乱であり、東王の命令に従わなければならなかった他の王たちの不満が高まった。すると一八五六年に楊秀清は彼を洪秀全と同じ「万歳」に封じるように求め、さらに洪秀全の救世主としての地位を脅かした。これに逆上した洪秀全は楊秀清の殺害を命じ、内部分裂である天京事変が発生した。つまり太平天国は皇帝の称号を否定したものの、救世主信仰とシャーマニズムによって大きな打撃を受けたのである。

いっぽう太平天国が長江流域に勢力を拡大すると、無力だった清朝正規軍に代わって曾国藩の率いる地方武装集団である湘軍が太平天国に対抗した。曾国藩は儒教文明の危機を唱え、同郷の読書人（儒教的知識人）に故郷の農民を率いさせた。読書人の多くは地方の新興勢力であったが、清朝の体制下では活躍の場がなかった。曾国藩は太平天国鎮圧の軍事的功績をあげることで、彼らに政治的な発言力を与えようとした。

おりしも中国では専制政治の弊害である中央政府の画一的な統治に代わって、地方のエリートが政府の手の及ばない行政サービスを補完する「自治」が模索されていた。太平天国もこうした変化を反映し、占領地で地元出身の官吏に統治を行わせる郷官制度を実行した。曾国藩は彼のもとに参集した新興エリートたちに地域の治安維持や兵糧の調達を委ね、既得権益を失うことを恐れた地方官僚や旧来の有力者と競合した。つまり湘軍の登場は中央に権限が集中していた清朝の支配体制を揺り動かす結果を生んだのである。

だが清朝は漢人の在野勢力である湘軍の台頭を快く思わなかった。湘軍が長江中流域の重鎮である武漢を奪回すると、喜んだ咸豊帝は曾国藩を地方長官に任命したが、側近が彼らの危険性を指摘すると慌てて命令を撤回し、曾国藩に無位無官のまま太平軍と闘わせた。曾国藩も中国官界の権力闘争がもつ怖さを良く知っており、中央政界に進出するよりは地方で自分たちの勢力を拡大することを選んだ。

一八六〇年に太平天国が清朝のドル箱である長江下流域に進出すると、清朝は曾国藩を两江総督として急ぎ救援に向かうように命じたが、曾国藩は長江中流域の平定が先決として動かなかった。このように曾国藩が清朝の中央政府と距離を置いた結果、翌年西太后らがクーデターを起こし、曾国藩らの後ろ盾であった肅順らが肅清された時も、曾国藩と湘軍は影響を受けずに済んだ。洪秀全らが新たな中央政権の樹立をめざし、権力闘争によって内部分裂を生んだのと比べると、地方での勢力拡大に専念した曾国藩の選択は慎重であった。

一八六四年に湘軍は南京を陥落させ、太平天国は滅亡した。この時曾国藩に新王朝樹立を求める声もあったが、清朝の嫌疑を受けることを恐れた曾国藩は湘軍を解散した。その代わりに曾国藩が行ったのは次世代の育成であった。彼の学生で淮軍を率いた李鴻章は、他の湘軍、淮軍出身の地方長官と共に省を単位とする地方政府の権限強化に努め、二世紀前半の聯省自治（省を単位とする連邦制国家構想）へつながった。だがこれらの政権構想は中国国民党、共産党によって「列強の侵略に利する分裂主義」として批判され、中国では異なる政治勢力の存在を認めない党国体制が現在も続いている。皇帝を否定しきれなかった中国の政治体制に求められている課題は、社会の多様性を容認したうえで地方分権を進めることなのである。

〔雑誌論文〕(計 7 件)

- 菊池 秀明 太平天国北伐軍の敗退と援軍の臨清攻撃 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』39 91 - 132 2013 年
- 菊池 秀明 太平天国北伐軍の壊滅とその影響について 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』40 1 - 30 2014 年
- 菊池 秀明 太平天国西征軍の湖北進出と廬州攻撃 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』41 135 - 163 2016 年
- 菊池 秀明 太平天国と湘軍の湖南岳州、湖北武昌と田家鎮をめぐる攻防戦 国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』43 1-29 2017 年
- 菊池 秀明 太平天国「封建王朝論」・皇帝を否定しきれなかった救世主 国際基督教大学 学報 3-A アジア文化研究 45 17 - 26 2018 年
- 菊池 秀明 書評 土肥歩「華南中国の近代とキリスト教」史学雑誌 127 編 6 号 95 - 103 2018 年
- 菊池 秀明 書評 藤原敬士「商人たちの広州 - 一七五〇年代の英清貿易」歴史学研究 981 号 58 - 61 2018 年

〔学会発表〕(計 10 件)

- 菊池 秀明 暴力革命能否被肯定・南京建都時期欧州人對太平天国宗的認識 太平天国定都南京 150 周年学術研究討論会 2013 年 10 月 26 日
- 菊池 秀明 太平天国軍中の私人結党与地方武装集团 2014 年 11 月 15 日 上海空軍額院招待所
- 菊池 秀明 湘軍の湖北、江西経営とその支持者、反对者・太平天国時期の地方武装集团が中国近代史に与えた影響について 2014 年 11 月 17 日 南京大学歴史系
- 菊池 秀明 なんじの敵を赦せるか・太平天国の讀書人、旗人対策 南京大学歴史系 2015 年 5 月 26 日
- 菊池 秀明 湘軍の湖北、江西における地域経営とその支持者、反对者 中央研究院近代史研究所 2016 年 3 月 21 日
- 菊池 秀明 なんじの敵を赦せるか・近代中国の内戦における報復の暴力のゆくえ 台湾大学歴史系 2016 年 3 月 22 日
- 菊池 秀明 湘軍對湖北、江西的經營和其支持者、反对者 一兼談太平天国時期地方武装對中国近代史的影響 香港中文大学歴史系懇話会 2016 年 5 月 31 日
- 菊池 秀明 汝能否寬恕汝之敵? -太平天國對待讀書人、旗人的歷史- 第五回「漢化、胡化、洋化：伝統社会的挑戰与回应國際学術研討会」2016/11/5 台湾国立中正大学
- 菊池 秀明 太平天国封建王朝論 2018 年太平天国史研究会学術研討会 南京大学 2018 年 11 月 18 日
- 菊池 秀明 中国歴史上的「人的移動、情動的移動」南京論壇 2018 南京大学 2018 年 11 月 19 日

〔図書〕(計 5 件)

〔単著〕

- 菊池 秀明 末代王朝与近代中国(講談社『中国的歴史』10) 広西師範大学出版社 2014 年 383 頁
- 菊池 秀明 『北伐と西征・太平天国前期史研究』汲古書院、586 頁、2017 年

〔共著〕

- 台湾・国立中央研究院台湾史研究所編『辺区歴史与主体性形塑・第四届國際漢学会議論文集』211 - 253 2013 年
- 上田信編著(13 名) 清水書院 『悪の歴史 東アジア編下・南、東南アジア編』469 2018 年
- 東京歴史科学研究会編 『歴史を学ぶ人々のために 現代をどう生きるか』岩波書店 323 頁 2017 年

〔産業財産権〕
出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。